

22 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、10ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 文章を読んで、要点を把握する。
- (2) 年賀状に、近況を知らせる一言を添える。
- (3) やかんの水が沸騰して、ふたが音を立てる。
- (4) 宵の口から、花火大会の会場に大勢の人が集まる。
- (5) 三年間の学校生活を顧みて、卒業文集の原稿を書く。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 海外に行くために、リョケンを申請する。
- (2) 奉仕活動を通じて、地域の方々とシタしくなる。
- (3) 料理のザッシを見ながら、夕食の献立を考える。
- (4) トラックでユソウされた新鮮な野菜が店先に並ぶ。
- (5) 駅に降り立つと、アタリ一面に菜の花畑が広がっていた。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

「町は店で決まる。」

それも父得意の言い分だった。娘の目からも父がそんなに熱心に商売をしているようには見えなかったけれど、それでもうちの店があることがこの町の一端を表しているのだとすれば、やっぱりうれしい。父が町に認められるようでうれしい。

店の名前はマルツ商会という。津川の津を丸で囲んでマル津と読ませる。情緒も何もない、そのまんまの店名だ。名前を聞いただけでは何の店かわからない。聞いてもわからない、と子供の頃はよく友達に言われた。

フルドーグヤ。父はそう言った。友達はフルに納得がいかない。真由も未知花ちゃんも顔を見あわせて、なんでシンじゃないの、と訊いた。フルでも売れるの？ 幼かった私は一緒になって首を傾げた。たしかに、他の店には新品しか置いていない。読み古した新聞だとか、醤油の染みのついたブラウスだとか、食べかけの林檎だとか、そんなものはどこにも売っていない。うちの店にある品は、古ければ古いほど大きな顔をしているみたいだった。祖母は亡き夫が始めた店をフルドーグヤとは言わず、コッソーヒンテンと呼ぶ。コッソーヒンってなに？ 友達が訊いても私に説明はできない。古道具も骨董品も私の手にはあまりあつた。

店にはフルが揃っている。皿だとか椀だとか、由緒正しい掛け軸だとか。お客さんは唸る。長いこと見入っていて、それから小声でなにやら父と話しはじめる。それでまた長いこと見入る。うんうんうなずきながら眺めたりもする。一見さんは少なく、たいてい見知った顔だ。対する商品も、知っ

た顔が多い。どんどん出ていったり入ってきたりすることがない。そこも他の店とは違ふところだ。

簡単に手を伸ばしたり、触れたり、ちょっとしにくいようなものが並ぶ。アンティークと呼ばれるような、若い人にうけるお洒落な品物はない。そのあたりを飛ばして、いきなり生活の塊がごろごろするコーナーが現れる。町の人たちから預かった品々だ。それらは一か所に集められ、それでもきちんと正座してお客を待っているような顔をしている。でも私は、この委託品の一角が好きになれなくて、無論父の好みでもないはずで、だから、あるとき訊いたのだ。

「どうしてああいうものを置くの。」

父はやつぱり口の端を上げて私を見た。

(1) 「うん、面白いだろ。」

持ち込む人は、その品物に価値があると信じている人がほとんどだ。どんなにわくがあるか、その品に込められた思いや、それを自分がどんなに大事にしてきたか、蕩々と語っていくのだそうだ。その話が話し手に近ければ近いほど面白い。逆にただの品物自慢だとまず面白くない。自慢するような品なら店の中にくらでもあるのだ。

亡くなったご主人が大切にしていたという壺を、年配の婦人が持ち込んだ。

「いわれは特に聞いてませんから。」

最初はつまらなさそうにさっさと置いて出ていこうとした婦人は、父の出したお茶を飲みながら、やがてぼつんぼつんと語りはじめたのだという。

まだ結婚したばかりのある夜、地震があった。婦人は咄嗟に、隣に寝ているはずのご主人に手を伸ばした。ご主人はすでにいなかった。飛び起き

て、棚に飾ってあった壺を抱えていたのでそうだ。何年か経ったある日には、子供たちが遊んでいて壺に触れそうになり、ご主人が血相を変えて怒鳴った。そんなに怒るくらいなら大事にしまっておけばいいじゃありませんか、と婦人はあらためて憤ったように話したという。

それがね、と父はおかしそうに言う。壺にまつわるご主人との思い出を二時間も話すうち、婦人は壺を大事そうに撫ではじめた。いったんは店に置いて帰ったものの、三日も経たずに引き取りにきたらしい。

「そうするとき、壺だけじゃなく、毎日自分たちが使っている物や、店にある他の品物に対する目も変わってくるんだな。」

「どう変わるの。」

「うん。」

(2) 父は私を見て、じわりと笑った。

「そうだな、麻子の考えてるとおりだよ、だから『ああいうもの』も置いてるんだ。」

私は店が好きだ。

朝、誰もいない店に入り、澀んだ空気に身を浸すのが好きだ。⁽³⁾窓を開けて風を通す前の埃っぽい匂いを嗅ぐと、全身の毛穴が閉じて余分なものが何ひとつ出ていかない、落ち着いた気持ちになれる。

サンダルを履いて、店の中をぐるっとひとまわりする間に、足は勝手に何度も止まる。ここに唐代の水瓶、あの棚に根来塗りの盆、こっちはアケビの籠。床や棚にいつもの顔を見つけてほっとする。売れないことに安心していいんだろうか、とちょっとだけ思う。いいんだよ、と父なら言うだろう。好きなものが売れないことを父はたぶん本気でよろこんでいる。

備前の皿、香炉、伊万里の猪口。そこにそれらがあつて、目が合うだけで、ふくふくとよるこびが湧き上がる。順々に眺めながら、ゆつくり足をを進める。視線を移す。

常滑の壺も、素性のよくわからない肌の美しい甕も、私を待っている。私に話しかけようと、じつと機会を窺っているように見える。気安く声をかけてくる陽気なもの、気難しそうにむつりしているのも、性質はいろいろだけど、みな、眺められ、話しかけられるのを待っている。ときどき、なんと声をかけていいのかわからないのも並んでいる。そういうときは向こうから話しかけてくるのを待って、じつと耳を澄ますばかりだ。

伊万里の赤絵皿の前で立ち止まっていたときに、急に後ろから父に声をかけられたことがあつた。足音にも気配にも気づかず皿を眺めていた私は小さく声を上げるほど驚いた。父は振り向いた私の肩に自分の両手を載せ、私が今まで見ていたものを見た。

⑤ へえ、麻子はそれが好きなのか、と父は言った。ごく軽い調子だったが、その声に込められたものを私は探ろうとし、すぐさま中止した。なにかくすぐつたいような、ほんのちよつとだけ誇らしいような響きを私の耳が嗅ぎ分けたから。父が私の目を値踏みした。そうして、たぶん高い値を付けたのだ。

(宮下奈都「スコーレNo.4」による)

〔注〕 一見さん——店に初めて訪れる客。

〔問1〕「うん、面白いだろ。」とあるが、この表現から読み取れる父の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 店の品物に関心をもっている麻子に興味を覚え、古道具屋を始めるようになったいきさつを得意げに披露しようとしている様子。

イ 店の品物について質問してきた麻子に喜びを感じ、品物には持ち主の思いが込められていることを教えてやろうとしている様子。

ウ 店の品物について自分と異なる見方をしている麻子に疑問を感じ、自分の好みがあまく伝わるように解説しようとしている様子。

エ 店の品物に不満をもっている麻子の思いに気付き、どの品物も自分の好みで揃えたことを丁寧に説明してあげようとしている様子。

〔問2〕父は私を見て、じわりと笑った。とあるが、このときの父の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア より深い理解を求めようとする麻子に感心しながらも、とっさに答えることができない自分に歯がゆさを覚えている。

イ 長い経験の中で理解できた品物の価値を説明するのは難しいと感じ、仕方なく麻子の思うとおりに任せようと思っている。

ウ 物への思いを伝える話に乗ってきた麻子の様子から、自分と同じ価値観の芽生えを感じ取って満足感を味わっている。

エ 自分にとっては楽しい逸話であっても、麻子の期待する答えになっていないと察し、場の雰囲気を取り繕おうと思っている。

〔問3〕⁽³⁾ 窓を開けて風を通す前の埃^{ほこり}っぽい匂^{にお}いを嗅^かぐと、全身の毛穴

が閉じて余分なものが何ひとつ出ていかない、落ち着いた気持ちになれる。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 誰もいない店内で好きなものを心ゆくまで楽しんでいる麻子の気持ちを、時間の経過とともに説明的に表現している。

イ 朝のひっそりとした店内で安心して麻子の気持ちを、細やかな視点で丁寧にとらえて写實的に表現している。

ウ 朝の澱んだ空気に満ちた店内の様子とすがすがしい麻子の気持ちとを、鮮やかに描き分けて対照的に表現している。

エ 開店前の店内で古いものに囲まれて満ち足りている麻子の気持ちを、感覚的な言葉を用いて印象的に表現している。

〔問4〕⁽⁴⁾ 順々に眺めながら、ゆっくり足を進める。とあるが、「私」が「ゆっくり足を進める」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア いつも見慣れた品物を見ていると自然に幸せな気持ちになり、品物の一つ一つと心を通い合わせようとするから。

イ 気に入った品物があふれている店内で思わずうれしさが込み上げ、どのように見て回ったらよいか戸惑ってしまうから。

ウ 父が今までに話してくれた品物の産地を思い起こしながら、時間をかけて自分なりにその価値を見極めようとするから。

エ 好きなものが売れ残っていることに喜びながらも、これほど良いものがなぜ売れないのかと心配になってしまうから。

〔問5〕⁽⁵⁾ へえ、麻子はそれが好きなのか、と父は言った。とあるが、あ

なたが麻子だとして、このときの麻子の気持ちを父に伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

本読みとは、単に知識を吸収する行為を指す概念ではありません。テクストとして表現されたものを、現代に生きる人間が未来を創造するために再解釈し、再度その現代的意義を創造するという営みが「本読み」です。

(第一段)

長く語り継がれてきた名著は、時代を超えた力をもっています。しかしその力を現実のものとし、未来を創造するための力に変換するには、読書という再解釈の営みが欠かせません。名著とは、時代を超えて読み継がれているテクストに与えられている尊称です。(第二段)

よく、「図書館は思想の墓場」などと言われます。確かに、そうした側面もあるでしょう。誰にも読まれることなく図書館の蔵書棚に見捨てられたままの本に書かれている思想は、「死んで」います。^①しかしそれは、生き返る可能性を含みつつ、発見されるときまで待機しているものでもあると言えます。(第三段)

たとえば、現在のすべてのコンピュータの演算の基本として使われている「ブル代数」は、長らく「死んだ」思想として図書館の蔵書棚に埋もれていました。それを発見したのはシャノンです。この「シャノンによるブルの再発見」がなければ、ブルの思想は現代でも死んだままだった可能性さえあります。同様のことは、「メンデル遺伝学」についても言えます。ド・フリースがメンデルを再発見したのは一九〇〇年のことであり、メンデルによる発表から三〇年以上もたってからのことでした。(第四段)

端的に言うならば、「死んだ思想」というのは誤った極端な表現で、思

想は「眠っている」のだということです。そして、時代が変化していくなかで、眠っている思想が突然意義をもつことがあるのですが、それを目覚めさせ、生きた思想にするのが、「本読み」の創造的側面です。(第五段)

眠ったままの思想は、思想そのものではないと言えます。思想は、私たちの頭の中で有用な道具として構築されて初めて、思想たり得るのです。思想史を学ぶ目的は、私たちの来歴を知ることにあるのではなく、人類が考案してきた有効な方法と対処の歴史を知り、それを現代において自分の生活に役立てるといふ点において初めて意味をもつのだということです。(第六段)

(第六段)

読書は、先達の思想を学ぶという受動的かつ消極的な営みではなく、その思想を「現代の装い^{よそお}のもとに、新たに蘇^{よみがえ}らせる」という積極的な意味をもっています。(第七段)

学問の基礎となるのは知識の蓄積です。私たち一人一人が可能な知識の積み上げは微々たるものでも、思想家や研究者が過去において到達した思考や知識を未来の世代に生きる人間たちが次々と継承していく過程で、その蓄積は次第に大きなものとなっていきます。(第八段)

二一世紀に生きる私たちは、ソクラテスよりも^{*}アリストテレスよりも^{*}アインシュタインよりも、多くの知識を自分のものとすることができるはずですし、事実、彼らが知るよしもなかった多くのことを知っています。したがって、可能性としては、そのような歴史上の偉大な思想家よりも「賢く」なることができるはず^②です。しかし実際問題としては、必ずしもそうではありません。^②思想の蓄積は、科学技術の蓄積のようには、うまくいっていないのが現状です。(第九段)

思想の蓄積が、技術の蓄積のようにうまくいかないのは、技術が「もの」によって蓄積されていくのに対し、思想は「人」によって蓄積されていくという事情に原因があります。現代の私たちは「トランジスター」を発明する必要はありません。既に存在するトランジスターを単に利用するだけで、その発明までになされた蓄積を自分の技術とすることができます。同様に、私たちは「構造主義」や「資本主義」を発明する必要はありませんが、それを利用するためにはまず、その思想を情報として自分の頭の中に構築する必要があります。モノや道具は、少々の学習で使用することができますようになりますが、思想を使用するためには、それまでに生み出された知識の蓄積過程を私たち個人個人がもう一度たどってみる必要があるということです。(第十段)

しかし、私たちの社会は、技術や「モノ」が高度に進化し、人間がその進化に追いついていないという状況に陥りつつあります。そしてその段階で、新たな問題に直面したり、疑問点や不明な点が生じたりします。その問題や疑問は、かつてそれらを扱った本にもう一度戻ることによって解決される場合もありますが、やはりいままでの範疇を超えた新たな困難を孕んだ問題群であったりするために、従来の知識でうまく扱えるものばかりではありません。(第十一段)

しかし、人類の知性や理性の歴史とは、そのようにして新たに発生した問題や疑問に対して、蓄積されてきた知識を止揚しながら新しい対処法を考案してきた歴史であるはずで、そこで本読みの役割とは、ある思想を自分のものにし、それを生活に生かし、さらにそれと現実を照らし合わせながら新たな問題を見出して、その解決のための努力をするという「生

きている限り永遠に続くサイクル」における重要なエンジンの一つであるということ(第十二段)

私たちは、先人たちが一生を費やして構築したある知識や思考に触れることによって、それらを蓄積・伝達し、よりよい未来を構築していくことができます。もしも読書をしないのであれば、私たちは、論理学も精神分析学も言語学も構造主義も、自分で発明しなくてはならない状態に陥ります。——もしくはそれらを知らない状態のまま生きていくことになりま

す。そのような道を選ぶのであればそれも一つの選択ですが、もう一つの道があります。それが、未来を紡ぐために読書をする、ということ(第十三段)

読書とは、決して受動的な営みではありません。(第十三段)

(高田明典「難解な本を読む技術」による)

〔注〕 テクスト——本文。

ソクラテス、アリストテレス——共に古代ギリシアの哲学者。

アインシュタイン——アメリカの理論物理学者。

構造主義——スイスの言語学者、ソシュールらが提唱した研究方法。

範疇——範囲、領域。

止揚——矛盾する諸要素を、発展的に統一すること。

〔問1〕⁽¹⁾ しかしそれは、生き返る可能性を含みつつ、発見されるときまで待機しているものでもあると言えます。とあるが、「生き返る

可能性を含みつつ、発見されるときまで待機しているものでもある」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 名著という尊称を与えられた本は、私たちが読み継ぐことによって、初めて筆者の意に沿った正しい解釈が可能となるということ。

イ 難解な思想である「ブール代数」は、私たちが進歩したコンピュータを利用して、初めて意義をもつものとなるということ。

ウ 思想史という学問は、読書で得た知識をもとに私たちの来歴を知ることによって、初めて学ぶ目的が達成されるということ。

エ 本に書かれている思想は、私たちが読書をして現代の生活に役立てることによって、初めて意義をもつものとなるということ。

〔問2〕⁽²⁾ 思想の蓄積は、科学技術の蓄積のように、うまくいっていないのが現状です。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 技術が蓄積されることで科学は高度に進化するが、私たち一人一人が自分のものにできる思想はごくわずかでしかないと考えたから。

イ 技術は利用すれば自分のものとして蓄積されるが、思想は知識や思考の道筋を自らたどらなければ使用も蓄積もできないと考えたから。

ウ 技術が継承されることでより高度な発明品が生まれるが、これまで蓄積された以上の思想は容易には創出できないと考えたから。

エ 技術は少々学習すれば習得できるが、思想はあらゆる知識を頭の中に構築しなければ情報として活用も蓄積もされないと考えたから。

〔問3〕 この文章の構成における第十一段の役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第十段で述べられた技術や思想の蓄積という内容を受け、現代社会における困難な状況を踏まえることで文章全体の結論に導いている。

イ それまでの段落で述べてきた科学技術の蓄積における課題について、具体的な解決方法を示すことでその後の論の展開を図っている。

ウ 第十段で述べられた知識の蓄積のための読書とは異なる例を列挙し、読書の意義について多面的に説明することで論点を整理し直している。

エ それまでの段落で述べてきた先達の思想を学ぶという読書の役割に対し、それに反論を加えることで自説の妥当性を強調している。

〔問4〕⁽³⁾ それが、未来を紡ぐために読書をするとはどういうことか。とあるが、「未来を紡ぐために読書をする」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 先人たちが一生をかけて構築した知識を吸収し、よりよい未来に向けてそれらを蓄積・伝達する仕組みを作り上げること。

イ たくさんさんの書物を読むことによって先人たちよりも賢くなり、未来の人々のために新たな思想を生み出すということ。

ウ 先人の知識や思考を再度解釈して現代に新たな課題を見出し、その解決に向けて努力する営みを限りなく続けるということ。

エ 先人の知識や思考では解決できない困難な課題の克服を目指し、日常的に読書を継続する大切さを自覚するということ。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「読書という積極的な営み」

というテーマで各自が具体的な体験を示して意見を発表することとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。やなども、それぞれ字数に数えよ。

5

次の文章には、芭蕉が門弟の去来と「下臥しにつかみ分けばやいとざくら」という句について問答する場面が描かれている。これを読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

芭蕉が門弟に教えた言葉の中にはいちど聞いたら忘れられないものがある。文芸上の真実を短く的確に指摘し、説得力があり、しかも詩的な響きに満ちている。

〔*去来抄〕に「下臥しにつかみ分けばやいとざくら」という句を挙げ、〔*先師、路上にて語りて曰く〕として、其角の集でこの句を見たが、どう思つて其角はこれを集に入れたのだろう、と去来に問いかけたことが記されている。へいかに思ひてか入集しけん。こういう言い方は、非難しているようにも聞こえる。しかし芭蕉は、いきなり非難したりする人ではない。ほんとうにわからなかったのだと思う。〔路上にて語りて曰く〕とあるのは、その疑問にとりつかれて、いてもたつてもいられなかったからだ。

〔其角が集〕というだけで、その集の名も作者名も記していないのは、作者やその集に迷惑をかけてはいけなかつたのだろうが、確かめてみると、元禄三年刊の其角編「いつを昔」に、其角が阿吟の相手として選んだ巴風の発句である。其角が単独に取り上げる発句よりは、たしかな評価があるに違いないと、芭蕉は思ったのだろう。

句の（へいとざくら）は糸桜で、枝垂桜のこと。〔花の下臥し〕は花の咲く下に横になる意の歌語だが、それを（へいとざくら）に合わせると、歌語であることを超えて、満開の枝垂桜の下に仰向きに横たわる恍惚が見えてくる。⁽¹⁾ 頭上を覆う白い迫力に陶然として、遠い世界へそのまま誘われる。

ところが、この句の（つかみ分けばや）は、下から手を伸ばして桜をつかみ分けたいものだ、手の届く範囲に思いを限定してしまう。芭蕉はこの句がそれほどいい句とは思わなかった。

しかし芭蕉は思った。自分の評価の基準がすでに其角や去来と違っているのではなからうか。其角は何か新しい考えによってこの句を評価していて、それが去来にはわかっているのかもしれない。それはいったい何だろう。「三冊子」には、別のところのだがこうある。〈師もこの道に古人なしといへり。また故人（古人）の筋を見れば求めるにやすし。今思ふ所の境も、この後何者出でて是を見ん。われはただ来者を恐る〉——師（芭蕉）もこの俳諧の道には頼りとなる古人はないといっている。また故人（古人）の作品を見ると、その成り立ちの筋道はたやすく理解できる。今私が作る作品も、これからどんな人が現れてこれを見て、たやすく筋道を見破られるかと思うと、私はただこれから出てくる後輩を恐れる、というのである。ここには常に門弟にも学ぼうとする芭蕉の謙抑な姿勢がある。自分の知らない新しみを恐れる心の若さがある。

去来は芭蕉の質問に素直に答えた。〈糸ざくらの十分に咲きたる形容、よく言ひ果せたるに侍らずや〉。——枝垂桜の満開の形容が、十分に言い尽くしてあるではありませんか。芭蕉はもつと別種の答えを期待していた。何か新しく目を開かれることがあるのではないか。俳諧の新しい動きを揺さぶり出すような答えがありそうな気がした。それなのに（つかみ分けばや）によって満開の糸ざくらの形容がよくいいおおせてあるとは、はなはだ散文的な答えではないか。去来の答えは、よく言い尽くしさえすればいいといっているように聞こえる。おそらく其角も同じ考えなのだろう。

それでは俳諧が散文の上にならなくても出られない。芭蕉は去来の言葉をすかさずとらえて切り返した。

〈言ひ果せて何かある〉。

——言い尽くしてしまって、いったいそこに何かあるのか。何もないではないか。〈何かある〉という反語には迫力がある。まことに胸のすく思いがする。もちろんこれは、去来による文章である。しかしその場面に直面しているような臨場感がある。このあたり、去来の筆が冴えている。続く去来の言葉（ここにおいて肝に銘ずる事あり。初めて発句に成るべき事と、成るまじき事をしれり）⁽⁵⁾もいい。この言葉が、芭蕉の名言に強烈なスポットライトを当てている。去来は瞬時に芭蕉のいわんとするところを悟って激しい感動に襲われた。

（山下一海「言い尽くさないこと」による）

〔注〕「去来抄」——去来が著した俳論書。

先師——すでに亡くなった先生。ここでは芭蕉を指す。

其角——江戸時代の俳人。

両吟——俳諧などを二人で作り合うこと。

巴風——江戸時代の俳人。

発句——俳句。

「三冊子」——江戸時代の俳人・土芳が著した俳論書。

初めて発句に成るべき事と、成るまじき事をしれり

——初めて題材や趣向において、発句になりそうなこととなり
そうにもないことがあることを知ったのである。

〔問1〕⁽¹⁾ 頭上を覆う白い迫力に陶然として、遠い世界へそのまま誘われる。とあるが、ここでいう「陶然として」の意味に最も近いのは次のうちではどれか。

ア はつとして イ 感化されて

ウ うつとりとして エ 圧倒されて

〔問2〕⁽²⁾ われはただ来者を恐るとあるが、この部分の現代語訳に相当する箇所を、本文中からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕⁽³⁾ 芭蕉はもつと別種の答えを期待していた。とあるが、芭蕉が期待していた「別種の答え」とはどのような答えか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア この句によって、作品を作る筋道が簡単に見破られるのではないかと心配していた芭蕉を、安心させるような答え。

イ この句のように、言葉の限りを尽くして表現するところに俳諧の新しい在り方があると、芭蕉に説明するような答え。

ウ この句が評価されるようでは、俳諧は散文を超えられずに将来が危ういのではないかと、芭蕉に進言するような答え。

エ この句が選ばれたのは、俳諧の新時代の到来を予感させる価値基準によるものだと、芭蕉に気付かせるような答え。

〔問4〕⁽⁴⁾ すかさずとあるが、これと同じ意味・用法で「すかさず」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問5〕⁽⁵⁾ この言葉が、芭蕉の名言に強烈なスポットライトを当てている。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 去来の言葉が、胸のすくような迫力こそが俳諧の神髄だとする芭蕉の名言を分かりやすく説明し、その意義を強調しているということ。

イ 去来の言葉が、語り尽くさないとところに俳諧の本質があるということ。芭蕉の名言に説得力を与え、その奥深さをきわ立たせているということ。

ウ 去来の言葉が、臨場感こそが俳諧には不可欠だとする芭蕉の名言を論理的に裏付け、その正当性を浮き彫りにしているということ。

エ 去来の言葉が、何も言わないところに俳諧の極意があるという芭蕉の名言の意味を伝え、その独自性を印象付けているということ。